

川崎病心後遺症発生頻度の時系列変化
— 川崎病全国調査成績より —
(分担研究：川崎病の疫学的研究)

中村好一*、藤田委由**、永井正規**、原 徳寿**
柳 川 洋**

要約 心後遺症の有無を調査した第8回及び第9回川崎病全国調査の結果より、川崎病心後遺症発生頻度の時系列的変化を観察し、発生頻度の周期的な変化の有無、川崎病の流行との関連性などを明らかにした。

見出し語 心後遺症、時系列、流行

研究目的・方法 川崎病心後遺症発生頻度の周期的な変化の有無、川崎病流行との関連の有無を明らかにすることを目的として、川崎病心後遺症発生頻度の時系列的変化を観察した。使用した資料は心後遺症の有無を調査した第8回および第9回川崎病全国調査結果である。

4年6か月(1982年7月～1986年12月)にわたる調査結果を月別(54か月)に集計し、各月の患者数及びその中で心後遺症を持つ患者の割合を計算した。観察は川崎病患者全体、性別、年齢別、地方別に行った。

なお、川崎病全国調査では、心後遺症を「発病1か月以降に冠動脈拡大(動脈瘤を含む)、狭窄(閉塞を含む)、心筋梗塞または弁膜病変の認められること」と定義して、その有無は主治医が判断している。

結果 観察期間中に36,391名の患者が報告され、そのうち心後遺症がある者は6,179名(17.0%)であった。これを月ごとに見ていくと、心後遺症がある患者の割合がもっとも高かったのは1984年5月($173/815 = 21.2\%$)、もっとも低かったのは1982年10月($53/408 = 13.0\%$)で、8.2%の開きがあるが、特に高い時期や低い時期はなく、流行と心後遺症発生頻度の関連も認められなかった(図1)。性別(図2および図3)、年齢別、地方別の観察でも、全患者と同様、特に一定の傾向は認められなかった。

* 福岡県京都保健所(Miyako Public Health Centre, Prefectural Government of Fukuoka)

** 自治医科大学公衆衛生学教室(Dept. of Public Health, Jichi Medical School)

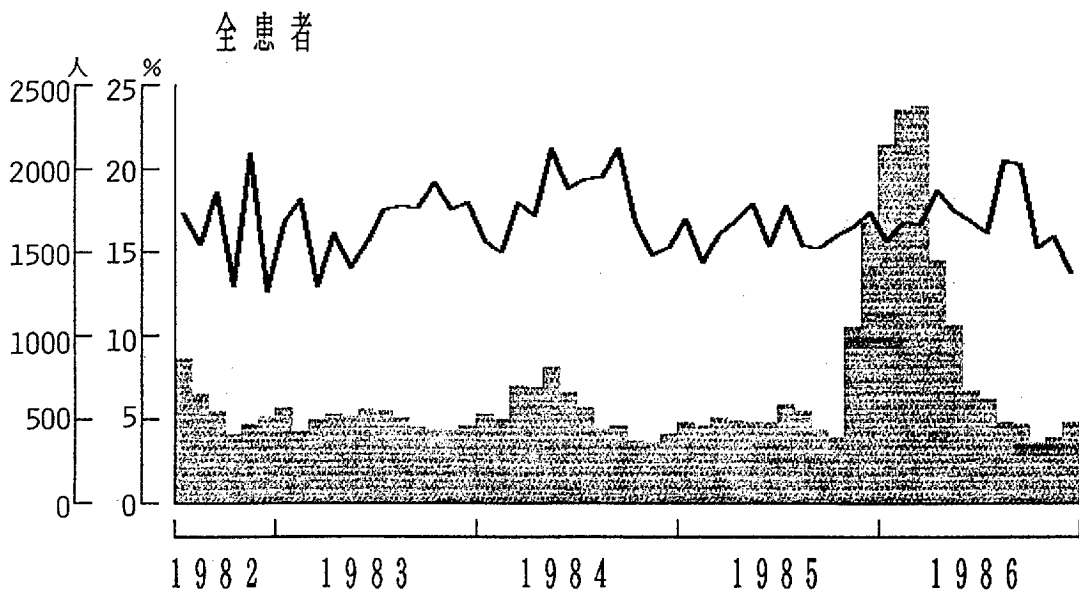


図1 月別川崎病患者数と心後遺症発生割合

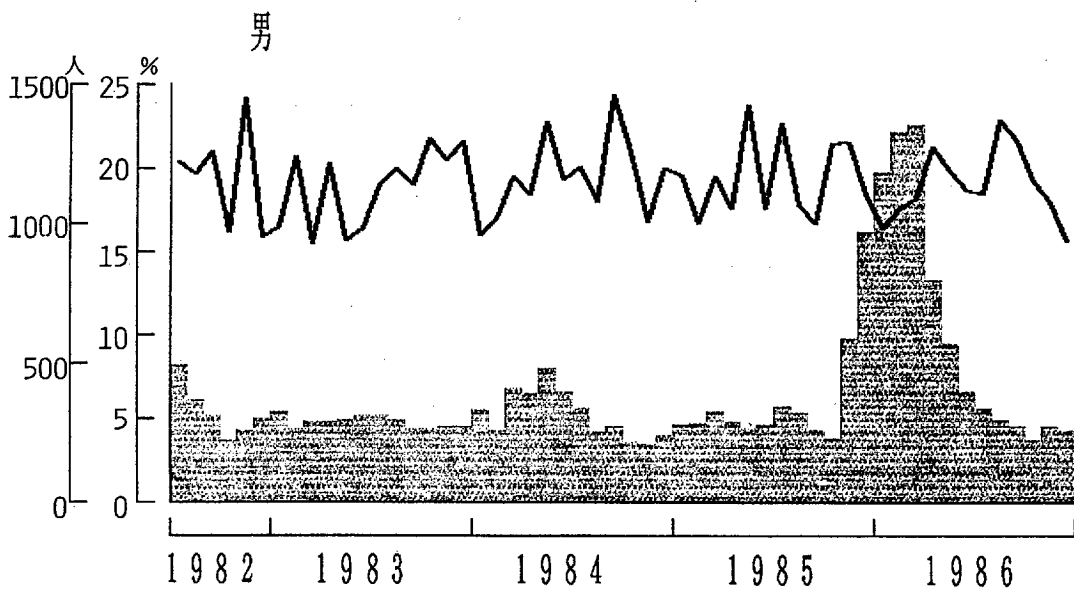


図2 月別川崎病患者数と心後遺症発生割合

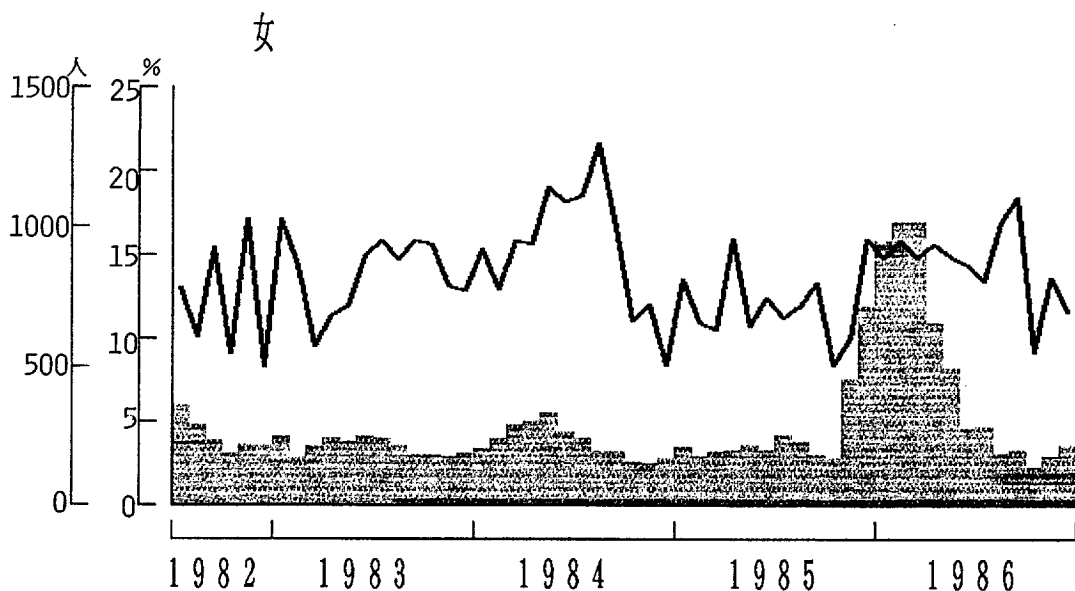


図3 月別川崎病患者数と心後遺症発生割合

考察 川崎病の流行と致死率の関係については、川崎病全国調査の成績¹⁾および著者らによる人口動態統計を利用した死亡の解析²⁾から、特に流行年で致死率が前後の年と比較して著しく高い、あるいは低い傾向は示していないことが判明していた。川崎病の死亡は主に心臓の障害によるもの²⁾であるため、今回の心後遺症発生頻度と流行との間に関連が認められないという結果も、従来の研究結果と矛盾してはいない。

また、心後遺症の発生頻度は観察した4年6月の間にほとんど変化していないにもかかわらず、この間の致死率は減少している^{1) 2)}のは、川崎病

の治療としてγグロブリンが使用される頻度が高くなってきた¹⁾ことによる可能性も考えられるが、この点に関してはもう少し詳細な検討が必要であろう。

文 献

- 1) 厚生省川崎病研究班：第9回川崎病全国調査成績、小児科，1987；1059-1066。
- 2) 中村好一，藤田委由，永井正規，柳川洋：川崎病死亡例の研究 - 1975年～1985年の人口動態統計をもとに - 日本小児科学会雑誌，1988；92：2193-2199。

Abstract

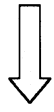
Proportion of patients with cardiac sequelae

— Chronological change and association with an epidemic —

Yosikazu Nakamura, Yasuyuki Fujita, Masaki Nagai,
Norihisa Hara, Hiroshi Yanagawa

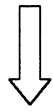
Using the data of 8th and 9th nationwide surveys of Kawasaki disease, chronological change of the proportion of patients with cardiac sequelae and the association between the proportion and numbers of patients by month were analyzed. The observed period was between July 1982 and December 1986 and numbers of patients observed in this study was 36,391.

There was no chronological trend of the proportion and the proportion was neither high nor low during the epidemic period of November 1985–May 1986.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約 心後遺症の有無を調査した第8回及び第9回川崎病全国調査の結果より,川崎病心後遺症発生頻度の時系列的変化を観察し,発生頻度の周期的な変化の有無,川崎病の流行との関連性などを明らかにした。